

rang gi mtshan nyid kyis grub pa 再論

福 田 洋 一

1 はじめに

rang gi mtshan nyid kyis grub pa は、ツォンカパの中観思想で用いられるキー概念の一つである。とはいっても、ツォンカパ自身がそれについて明示的に考察を行っているわけではなく（すなわち、ツォンカパの議論の主題には登らない。）、この概念を使用しながら自らの見解を説明し論証しているにすぎない。そのことは、この用語の意味するところについて当時の仏教界ではある程度のコンセンサスがあったことを示している。しかし、残念ながらその伝統から外れている我々にとって、このように直接議論の対象にならない概念を理解することは非常に困難である。その意味を理解するためには、様々な文例を精査し、その前後の文脈から意味を帰納していくほかはない。実際に、この用語についてこれまで多くの研究者が注目し、専論もいくつか発表されている。特に吉水千鶴子氏は、この用語をタイトルに冠した一連の論文において¹⁾、この用語を軸にツォンカパの中観思想を分析している。その中で吉水氏は rang gi mtshan nyid を自性 rang bzhin などと同義とし、他に依ることなく存在しているリアルな実在と考え、rang gi mtshan nyid kyis という副詞句を「本来的にリアルな intrinsically real」という様態的な意味で解釈し、遍計所執の「名称や語によって仮設されたもの ming dang tshig gis btags pa」と逆のあり方を指す、と主張されている。また松本史朗氏は、自立派が言説有を「意識に現れることによって設定される存在」と規定し、それが同時に rang gi mtshan nyid kyis grub pa であると主張することから、この二つの規定を比べて「意識に現れるもの」= rang gi mtshan nyid であり、したがってそれは直接知覚の対象としての自相のことを指す、と解釈した²⁾。

これらの見解に対して、筆者はまず rang gi mtshan nyid が直接知覚の対象としての自相と異なること、そして、kyis という具格は「として」という同一性を表す意味ではなく、「によって」という根拠・原因の意味であることを指摘した³⁾。そ

の上で rang gi mtshan nyid が何であり、それによって成立するということがどういうことであるかを、自立派と帰謬派の理論について検討した⁴⁾。

その後、木村誠司氏は筆者の解釈が当てはまる例と当てはまらない例を挙げられた⁵⁾。また、吉水氏は英文で短くコメントされ、ツォンカパの唯識解釈の用例を検討していないことを理由に筆者の主張を受け入れられないと述べられた⁶⁾。

これらの指摘を受けて、本稿ではツォンカパの『善説心髄 (LN, Zhol 版のフォーリオ・行番号を挙げる)』の唯識思想解釈における rang gi mtshan nyid kyis grub pa の意味を考察するとともに、筆者の基本的な立場をもう一度検討したいと思う。

2 唯識派・自立派・帰謬派の相違

rang gi mtshan nyid kyis grub pa と don dam par yod pa (勝義の存在) とは異なった系列に属する述語であるが、ツォンカパは、大乘仏教の三派、唯識派と自立派と帰謬派とで、これらが異なった関係にあると考えている⁷⁾。

まず、唯識派の主張では rang gi mtshan nyid kyis grub pa であるならば、勝義の存在である、とされる。この場合、この勝義の存在は文字通り実在するものとして承認される⁸⁾。自立派は、言説においては rang gi mtshan nyid kyis grub pa を承認するが、勝義においては、それを承認しない。自立派は、存在しているならば、それは rang gi mtshan nyid kyis grub pa であると主張するので、勝義においてそれが承認されないということは、勝義の存在が承認されないということを意味する。帰謬派は、rang gi mtshan nyid kyis grub pa であるならば、勝義の存在でなければならないと考え、さらにそのようなものは世俗においても勝義においても承認しない。

このような相違があるということは、それぞれの立場で rang gi mtshan nyid kyis grub pa の意味づけや位置づけが異なるということの意味している。言い換えれば、rang gi mtshan nyid kyis grub pa の意味を考える場合、どの立場での発言であるかを考慮する必要がある。と同時に、それらに共通の意味もあるはずである。このように、個々の立場における特殊な意味と、全体に共通する一般的な意味という二重の視点を念頭に置いて考えなければならない。以下、まず唯識思想の記述においてツォンカパがどのような意味で rang gi mtshan nyid kyis grub pa を使用しているかを検討し、それを踏まえて共通の意味を考えてみたい。

3 パラフレーズに基づく解釈

最初に、思想内容に入ることなく、語句の言い換えなどから分かることを指摘しておこう。以下、ほぼ同じ構造について述べられている文例から、rang gi mtshan nyid kyis grub pa に対応するフレーズを、否定形は肯定形に直して列挙する。

lto ldir ba bum pa'i tha snyad kyi gzhi 'am gnas yin pa de ¹⁾ lto ldir ba'i gnas lugs sam rang gi mtshan nyid kyis grub na / ²⁾ brda'i dbang gis ma bzhag par 'gyur la (LN, 31b1-2)

gzugs zhes tha snyad btags pa'i tshe sngon po gzugs kyi tha snyad 'dogs pa'i gzhi yin pa de ji ltar snang ba ltas pas na ³⁾ ming dang brdas bzhag pa min par ⁴⁾ rang gi gnas lugs kyi dbang gis grub pa bzhin du snang ngo // (LN, 30b6-31a1)

⁵⁾ tha snyad kyi dbang gis bzhag pa'i yod pa la tha snyad du yod pa dang / de'i dbang gis bzhag pa min gyi rang gi mtshan nyid kyis yod pa la don dam par yod par bzhag pa ste / (LN, 21b2-3)

以上の文例で番号を付けた部分を抜き出すと

- 1) lto ldir ba'i gnas lugs sam rang gi mtshan nyid kyis grub
- 2) brda'i dbang gis bzhag
- 3) ming dang brdas bzhag
- 4) rang gi gnas lugs kyi dbang gis grub
- 5) tha snyad kyi dbang gis bzhag

となる。このうち、1) から rang gi mtshan nyid が対象の lto ldir ba'i gnas lugs と等置される。また 4) では rang gi gnas lugs が rang gi mtshan nyid に対応していると考えられ、gnas lugs と mtshan nyid が等しいことを示している。gnas lugs は対象自身の実際のあり方であり、mtshan nyid も同様の意味と解することができる。一方、2) の brda、3) の ming dang brda、5) の tha snyad は、同じ bzhag という動詞に係り、言い換えである。1) および 3) での gnas lugs ないし brda の具格表現は、2)、4)、5) では kyi dbang gis、すなわち「の力によって」という、明示的に根拠を意味する表現で言い換えられている。1) から 4) までの文は、言説が付与される基体 (tha snyad 'dogs pa'i gzhi) が、ある仮説されたあり方のものであるとして、gnas lugs によって成立している、ないしは名称・言説によって設定される、ということを表している。したがって、gnas lugs から brda に至るまでの語句は、その基体があるものとして存在していることの根拠が言語的な活動にあるのか、それともその対象自身の存在の仕方に基づくのか、という対立を表しているのであって、概念的な存在であるのか本来的に実在するものであるのか、という対立を表現しているわ

けではない。

4 遍計所執と増益

以上の語句の置き換えや対応関係から rang gi mtshan nyid と kyis の意味はほぼ明確に規定できる。しかし、その思想内容はツォンカパの唯識思想の解釈の中心的話題として重要なものであり、それを調べることで、rang gi mtshan nyid kyis grub pa の思想的な意味がより明確になる。ツォンカパによる唯識思想の解釈では、三性説、三無自性説、了義・未了義などが重要なテーマとなるが、rang gi mtshan nyid kyis grub pa が意味を持っているのは、遍計所執における増益の構造においてであるので、本稿ではこの点のみを取り上げることにする。

ツォンカパは遍計所執とそれへの増益の構造について言葉を変えながら繰り返して述べているが、まとまった記述として次のものがある。

kun brtags rang gi mtshan nyid kyis grub par 'dzin pa chos kyi bdag 'dzin du 'dod pa'i kun brtags ni phung po la sogs pa la 'di gzugs so zhes ngo bo dang 'di gzugs kyi skye ba'o zhes sogs khyad par du ming dang brdar btags pa'i ngo bo'o // de tsam zhig tu ni phung po la sogs pa yod pas der yod par 'dzin pa sgro 'dogs min gyi phung sogs ngo bo der rang gi mtshan nyid kyis yod par 'dzin pa sgro 'dogs so // (LN, 29b3-5)

遍計所執とは、名称の基体である蘊などに対して、「これは色である。」というように、名称と記号において ngo bo (この ngo bo と次の khyad par については次節で検討する。)として仮設された ngo bo と、「これは色の生起である。」などの khyad par として仮設された ngo bo とである。この遍計所執には三つの構成要素が区別される。(1) 名称・言説の基体(蘊)、(2) 仮設された内容である ngo bo と khyad par (「色である」「色の生起である」)、(3) 仮設の基になるもの(名称と記号)。このうち、(2) が遍計所執である。

その蘊などに、仮設された ngo bo や khyad par があると言うだけであれば増益とはならない。そのような ngo bo や khyad par が rang gi mtshan nyid によって根拠付けられていると考えるとき、それは実際に存在していないものを構想しているので増益となる。rang gi mtshan nyid は、個々の増益を根拠付ける個々別々の特質の意味である。ここでは、上の遍計所執を元に、二つの捉え方を対比することによって増益、すなわち法我執(chos kyi bdag 'dzin)の有りが示されている。一つは単に「である」と捉えるだけの捉え方、もう一つは、「これこれである」ことが、これこれであるもの自身の特質、すなわち存在の仕方(gnas lugs)によって根

抛付けられていると捉える捉え方である。言うまでもなく、後者が、ないものをあると考える増益である。

このようにして、遍計所執を構成する三つの構成要素に加え、増益には第四の要素が付け加わる。すなわち (4) 仮設された ngo bo (すなわち遍計所執) が、それ自身の mtshan nyid によって成立していると把握することである。ここで注意をしなければならないのは、rang という代名詞が何を指しているかである。表現の上では、名称の基体を指しているようにも受け取られかねないが、正しくは仮設された ngo bo の方のみである。基体の方は依他起であり、それは唯識思想においては rang gi mtshan nyid kyis grub pa なものだからである。

5 ngo bo と khyad par

それでは、個々の mtshan nyid によって根拠付けられる (と思いをなされている)、遍計所執の ngo bo と khyad par とは、どのようなものであろうか。この遍計所執の構造とそれを ngo bo と khyad par (実際には bye brag) と主張する典拠は『解深密経 (SNS、デルゲ版 No.106)』にある。

gzugs kyi phung po zhes ngo bo nyid dam bye brag gi mtshan nyid du ming dang brdar rnam par bzhag pa dang / gzugs kyi phung po skye'o zhe'am 'gag pa zhe'am gzugs kyi phung po spang ba dang yongs su shes pa zhes ngo bo nyid kyi mtshan nyid dam bye brag gi mtshan nyid du ming dang brdar rnam par bzhag pa/ (SNS, 35a2-4 = LN, 9b3-4)

この文章に ngo bo nyid (kyi mtshan nyid) dam bye brag gi mtshan nyid は二回出てくるが、ツォンカパの注釈にもあるように (LN, 9b5)、最初は ngo bo nyid kyi mtshan nyid を、二度目は bye brag gi mtshan nyid を指すと考えるべきであろう。いずれの場合も、「設定される (rnam par bzhag)」の主語は言説・名称の基体である。

1. 実在する基体が、「これは色蘊である」というように ngo bo nyid kyi mtshan nyid として名称・記号において設定される。
2. 実在する基体が「色蘊が生じる・滅する。色蘊を永断する・遍知する。」というように、bye brag gi mtshan nyid として名称・記号において設定される。

この『解深密経』の引用が ngo bo と khyad par の最も詳しい具体例である。これによると、ngo bo nyid kyi mtshan nyid は「それは何であるか」という問いに対する答えであると言える⁹⁾。個々の対象において「これは何であるか」と問われた

ときの答えは、見方によって多少のぶれはあるとしても、例えば「白い」とか「長い」というような付帯的な属性と一線を描くものであることは明かであろう。この ngo bo nyid kyī mtshan nyid は、また『解深密經』の別の箇所 (SNS, 25a2 = LN, 3a2) では、諸蘊の「rang gi mtshan nyid」と言及される。両者を比較すれば、ngo bo nyid が rang に対応しているのが分かる。ただし、これは rang gi mtshan nyid kyis grub pa の rang gi mtshan nyid を指しているわけではない。今問題にしている ngo bo nyid kyī mtshan nyid, あるいは rang gi mtshan nyid は、仮設された遍計所執であり、それが rang gi mtshan nyid によって成立していると捉えることが増益だからである。実際、ツォンカパ自身は、遍計執されたものについては ngo bo (nyid) という用語を使い、rang gi mtshan nyid という言い方をしない。

bye brag gi mtshan nyid は、その ngo bo nyid として設定されたものについての様々な言明によって表現される事態である。『解深密經』の例では、色蘊を主語として、それが「生じる・滅する」と言われ、またそれを目的語として「永断する・遍知する」と言われる。これらは『解深密經』の別の箇所 (SNS, 25a2-3 = LN, 3a2) では、skye ba'i mtshan nyid, 'jig pa'i mtshan nyid, spang ba dang yongs su shes pa と言及されている。最後の spang ba と yongs su shes pa には mtshan nyid が付けられていないが、それが bye brag gi mtshan nyid であることから、spang ba'i mtshan nyid ないし yongs su shes pa'i mtshan nyid と考えて差し支えないであろう。これらは、たとえば、「色蘊が生じる。」が「生じるところの色蘊」というように色蘊を修飾する限定要素として書き直すことができ、そうした場合にそれを khyad par (限定要素) と呼ぶことも肯ける。これらは ngo bo nyid として設定されたもの (色蘊) のある特定の側面 (属性より広い意味で) を表す限定要素である。

この二つの mtshan nyid ないし ngo bo nyid は、名称や記号において設定されるものである。ming dang brdar の於格は、別の箇所では ming dang brdas と具格になっている。いずれにせよ、これを「として」という意味で考えるべきではない。これらは名称の基体に対して、これらの ngo bo や mtshan nyid 「として (du)」仮設される、ないしは設定されるのであって、名称や記号「として」仮設される・設定されるわけではないからである。名称や記号は、このように仮設が行われるきっかけ・基になるものと考えられる。名称を足がかりとして、基体がその名称によって表されるものとして想定されるのである。

このように名称や言説を基にして仮設された諸特質は、その基体に対して「～である」と述定できるようなものであり、そのように述定できる根拠が、それぞ

れの mtshan nyid である、という関係は、チベットの仏教文献で使われる mtshan mtshon gzhi という三つ組みの概念¹⁰⁾のうち、mtshon bya と mtshan nyid の関係とパラレルである。もちろん、この三つ組みの概念は必ずしも存在論的な立場を前提としてはいないが、その中で mtshan nyid を、単に名称や概念の述定根拠ではなく、存在論的な根拠として考える立場に立てば、本稿で述べてきた rang gi mtshan nyid kyis grub pa という概念が出来上がるであろう。ツォンカパの帰謬派の立場はそのことを批判していたのである¹¹⁾。

おわりに

～ mtshan nyid pa と～ btags pa ba という表現がしばしば用いられる。「真の～」[仮の～]などと訳されるが、これは、上で検討してきた rang gi mtshan nyid kyis grub pa と tha snyad du btags pa の対比に対応している。このうち～ mtshan nyid pa は、正確には mtshan nyid rdzogs pa、あるいは mtshan nyid rdzogs par tshang ba、すなわち「そのものがそのものであると言えるための mtshan nyid を完全に備えているもの」という意味であり、「真の～」というのは、その原意からの意識である。mtshan nyid を完備しているというのは、自らの mtshan nyid によって成立していると言うのとほぼ同じ内容である。また、自らの mtshan nyid によって成立しているものは、bden par grub pa であるのと同様、mtshan nyid pa なるものは、真なるものであることになる。もちろん、～ mtshan nyid pa は、rang gi mtshan nyid kyis grub pa が有する存在論的構造を想定する必要のない一般的な表現ではあるが、辞書的な意味の構造は同型であると言っていいだろう。

本稿では、ツォンカパの唯識解釈における rang gi mtshan nyid kyis grub pa の意味を、遍計所執に対する増益の構造に焦点を当てつつ検討してきた。その増益の構造自体は唯識思想に独特のものであるが、しかし、この術語の辞書的な意味自体は、他の立場での用法と異なるものではない。すなわち、ある存在 (chos) が、それ自身の設定根拠 (mtshan nyid) によって成立していることである。私は何も新しいことを主張しているわけではない。このことは、例えばグライラマ 14 世が「つぼの本質が究極的にどう言い表されているかを考えてみると、つぼの存在そのものは、かなりあやふやになってきます。つぼが何であるかということは、一種の約束ごととして取り決められているにすぎません。つぼをつぼと呼ぶ根拠は、その形にあるのか、機能にあるのか、あるいは材質にあるのか（つまり粘土や水などの混合物をつぼとよぶのか）と考えていくと、『つぼ』というのは単なる呼び名に

すぎないとわかるでしょう。」(点は筆者による)¹²⁾ と言っているのと同じことであり、それはおそらく現代のゲルク派の学僧が常識として理解していることでもある。本稿では単にそれをツォンカパの原典に当たって確認したにすぎない。

- 1) 紙数の関係で全部を挙げられない。拙稿「自相と rang gi mtshan nyid」『江島惠教博士追悼記念論集：空と実在』春秋社、2000年、p.186、注4を参照されたい。
- 2) 松本史朗「ツォンカパにおける言説有の設定」『チベット仏教哲学』大蔵出版、1997年、第6章。拙稿「ツォンカパにおける中観自立派の存在論」『日本西藏学会々報』45、2000年、pp.23-24 参照。
- 3) 上記拙稿「自相と rang gi mtshan nyid」。
- 4) 以下の拙稿参照。前掲「ツォンカパにおける中観自立派の存在論」。「ツォンカパの中観思想における言語論的転回について」『印度学仏教学研究』52-2、2004年。「ツォンカパによる言説有の言語論的解釈」『印度学仏教学研究』53-2、2005年。
- 5) 木村誠司「ツォンカパの自相説に関する一報告」『駒澤短期大学研究紀要』32、2004年。
- 6) Chizuko Yoshimizu, 'Tsong kha pa's Reevaluation of Candrakirti's Criticism of Autonomous Inference', *Svātantrika-Prāsaṅgika Distinction*, Ed. Georges Dreyfus & Sara McClintock, Boston, 2002, p.276.
- 7) 以下の要約の典拠は紙数の関係で省略する。
- 8) 木村氏が指摘する rang gi mtshan nyid kyis を「本来」あるいは「実質的に」と訳した方が分かりやすいという例も、この遍充関係を念頭に置けば説明がつくであろう。後に見るように rang gi mtshan nyid kyis grub pa の構造が意味を持ってくるのは、遍計所執に対する増益の構造を説明する箇所である。それ以外の場合には、rang gi mtshan nyid kyis grub pa であるならば、bden par (don dam par) grub pa であるから、それぞれの語句の中での構造の違いはなくなり、全体としての意味は限りなく近づく。しかし、そのことから rang gi mtshan nyid kyis という修飾語句の意味を、単純な「本来」などの様相的な意味で理解していいということにはならない。
- 9) ツォンカパは別の箇所では、dngos po de'i ngo bo nyid gang yin dris na ngo bo nyid gzugs yin no zhes lan 'debs ... (LN, 39b4-5) のように、「その実在物の ngo bo は何か」という問いに対して、「ngo bo は色である」と答えている。
- 10) 拙稿「初期チベット論理学における mtshan mtshon gzhi gsum をめぐる議論について」『日本西藏学会々報』49、2003年。
- 11) 前掲拙稿「ツォンカパの中観思想における言語論的転回について」参照。
- 12) グライラマ 14 世テンジン・ギャツォ『幸福論』塩原通緒訳、角川春樹事務所、2000年、pp.52-53。

〈キーワード〉 ツォンカパ、中観哲学、rang gi mtshan nyid kyis grub pa

(大谷大学教授)

ruled by the Juqu 沮渠 family (442-460).

198. On the Interpretation of PV III 338-340 by mKhas grub rje

Atsuki MURAKAMI

This paper aims at studying the interpretation of PV III 338-340 by mKhas grub rje. He interprets these three verses as those which establish *gzhan rig* (other-cognition) of Yogācāra. On the other hand, he has raised an objection to Tibetans who consider PV III 338 as presenting Sautrāntika theory, and considers PV III 339-340 to present Yogācāra theory. Such an interpretation can be traced to bLa ma dam pa bsod nams rgyal mtshan's PV commentary. Focusing on the difference of between both opinions, we examine why mKhas grub rje needed to understand these three verses as such. Most particularly, do these two commentators take PV III 338 as presenting Sautrāntika theory or Yogācāra theory?

199. *Rang gi mtshan nyid kyis grub pa* again

Yōichi FUKUDA

Rang gi mtshan nyid kyis grub pa is one of the key concepts of Tsong kha pa's Madhyamika philosophy, and Dr. Yoshimizu translates it as pertaining to what is "intrinsically real." In this paper, I investigate this concept in Tsong kha pa's interpretation of Yogācāra philosophy. In my opinion, *mtshan nyid* refers to the reason or cause of the characters, postulated on the basis of mundane words or concepts, and *kyis* means "by the power of" (*kyi dbang gis* as paraphrased by Tsong kha pa himself). This concept reflects the *mtshan mtshon gzhi gsum* relationship unique to Tibetan Buddhist literature. In this relationship, *mtshan nyid* means the reason for the predicate *mtshon bya* to the subject *mtshan gzhi*. If one takes this reason *mtshan nyid* as the real existent character of the postulated predicate *mtshon bya*, then that person can grasp the concept of *rang gi mtshan nyid kyis grub pa*.